



の いる 風 景

竹津 昇

さん



【たけつ のぼる さん】 55歳
 ● 88年の歴史を持つ北海道美術協会の会員。
 主に水彩画を専門としている。
 33年前、千美展に出展した花の絵で当時の最
 高賞である奨励賞を受賞。本人の初受賞となる。
 ※ 今年の千美展は、7月8日から13日までの間、
 市民ギャラリー2階で開催します。

芸術であふれる まちを目指し、 描き続ける



【きつねのチャランケ】
 自然とアイヌの共生を伝える絵本。
 竹津さんが水彩画で絵を描きました。
 千歳市立図書館で読むことができます。

油 絵や水彩画などの絵画、陶芸品など、数多くの美術品を展示する「千美展」。今年で36回目を迎える伝統のある展示会です。展示会を主催する千歳美術協会が事務局を務めている竹津さん。

竹津さんは、市内の中学校で美術の教員をしながら、自らも絵画を描き続けています。

きっかけは、小学校時代の教頭先生

竹津さんが、絵画の世界に入ったのは、小学生の頃にさかのぼります。「私が通っていた小学校の美術クラブで、顧問をしていた教頭先生は、私の絵を必ず褒めてくれました。そのときの嬉しさは、今でも忘れられないです」と当時を振り返ります。

「絵画には、描いた人の人格が現れます。絵画を褒めることは、描いた人の人格を褒めること。褒めて、自分の良いところに気付かせてあげたい」と、

自身の絵画の指導方針にも竹津さんは、「褒める」ことを生かしています。

海外で感じた純粋な気持ち

しかし、大学時代は、サッカー部に所属し、主将まで務めていた竹津さん。そこで絵が上手なチームメイトに出会います。

「絵画の話と一緒に写生しているうちに、『絵画が好きだ』という思いが抑えきれなくなってきました。いつしか、サッカーより絵画を描くことが生活の中心となり、日本中を巡り、訪れた場所をスケッチするほど絵画にのめり込んでいきました」といいます。

この思いは、竹津さんを日本にとどまらせることなく、フランスやスペインなど海外にも行って絵画を描いてきました。「それぞれの作品に、たくさんの思いが詰まっています。見るたびに、その場所の風や匂い、色などを全て思い出すことができている感じがします。普段は忘れっぽいのですが」と竹津

さんは笑顔で話します。

「海外での制作活動では、日本の花や草、木など植物一つひとつの力強さを思い出します。自分が日本人であることを改めて自覚できます」と海外で感じた純粋な気持ちを語ります。

芸術であふれるまちを目指して

昨年の千美展では、会場で水彩画の公開制作を実施するなど、開催内容を工夫している竹津さん。最後に、千歳の芸術環境について、尋ねてみました。

「残念ながら、千歳では、芸術に触れることができる環境が少ないと思えます。芸術は、個性の塊です。まちに、芸術という名の個性があふれば、千歳は、もっと素敵なまちになります。千美展が、そんなまちになるためのきっかけになれば嬉しいですね。そのため私は、絵画を描き続けます。今年の千美展で、1番良い絵画に選ばれるように」と絵画に込める熱い思いを力強く語ってくれました。